【地域活性化研究】

岡崎市における環境保全活動の課題意識からみる活動促進課題の抽出 人間環境大学 小宅由似・上野慶子

要旨

岡崎市における市民団体による環境保全活動の実態、及び活動参加者と大学生との間の活動に対する意識差を明らかにすることを目的として、活動団体、活動参加者、大学生の三者にアンケート調査を実施し、大学生の参加促進に向けた方策の提案を試みた。岡崎市においても活動参加者の減少や高齢化の傾向が示され、解決手段として大学生の新規参加の促進が求められた。参加意欲の向上には活動内容の充実やアピール、交流に対する支援が課題として考えられ、交流支援にはクラブ・サークルや講義・ゼミ単位での参加の推奨が有効であると考えられた。

1. 緒言

岡崎市は面積の約67.9%を緑被地が占める(2009年時点、岡崎市2012)、緑ゆたかな市である。「生物多様性に優れた自治体ランキング」(三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社2016)においても、岡崎市は「都市計画区域面積に占める、法令等により確保されている緑地の比率」「エコロジカルネットワークを形成しうる連続性のある緑地の評価」「都市の生物多様性や、生物の生息地または生育地の保全・再生・創出によってもたらされる生態系サービスの状況(緑地等による透水効果など)」「都市の行政計画における生物多様性の確保への配慮の状況」「生物多様性の確保に関する都市の行政計画における住民・企業等の参加の状況」の5項目で上位20%以内に入る(n=665)と評価を受けている。こうしたゆたかな緑を維持するため、岡崎市は1999年3月に「緑の基本計画」を策定し、緑地保全や都市公園の整備といった施策を展開してきた。総合計画後期計画においては「人・水・緑が輝く活気に満ちた美しい都市 岡崎」といった目標を掲げ、更なる緑量の向上と、緑地の有する様々な機能の活用を視野に入れた魅力ある都市の形成を目指している(岡崎市2012)。

一方で、2006 年度時点の都市計画区域内では、農業振興地域農用地区域や地域森林計画対象 民有林といった緑被地が減少傾向にあり(岡崎市 2012)、岡崎市に住む人々が普段の生活のなか で自然に触れる機会は減少しているといえる。こうした自然に触れる機会を補う手段の一つが、 環境保全活動への参加である。現在日本では、国や都道府県、市町村による「国民が、幼児期 からその発達段階に応じ、あらゆる機会を通じて環境の保全についての理解と関心を深めるこ とができる」(「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」第9条より抜粋)機会 の整備が求められており、市民による環境保全活動を推進する取り組みがされている(高瀬ほか 2014)。このことより、環境保全活動団体による保全活動そのものはもちろん、継続的な活動に 伴う参加機会の提供自体も緑地の保全においては重要な役割を果たしているといえる。

しかし、環境保全活動の1つである緑地保全活動を対象とした先行研究で、活動団体の人手不足や高齢化といった課題が指摘されている(栗田・植竹 1999, 中島・古谷 2004)。環境保全活動団体の継続的な活動を維持するためには参加者減少・高齢化の解決は必要不可欠であり、解決手段の一つとして大学生の参加促進が挙げられている(Takase et al. 2012)。高瀬・古谷の研究では大学生の活動参加促進課題として、解決の優先順位の高い順に(1)参加価値、(2)活

動条件、(3)活動不安、(4)身体負荷が挙げられた(高瀬・古谷 2013)。また、高瀬らの研究により環境保全活動団体と市民の間に大きな意識差が存在することが明らかにされており、参加者確保のためには意識差を埋める対策が必要であると指摘されている(高瀬ほか 2014)。

岡崎市は対外的に見れば、行政側から市民に対するはたらきかけ、市民の環境保全に対する意識が高い自治体であるといえ(三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 2016)、「おかざきの市民活動団体ガイドブック」を発行するほか、市民団体情報ポータルサイト「おかざき市民活動情報ひろば」(http://okazaki.genki365.net/)を運営するなど、市民に対する環境保全活動の情報提供にも積極的に取り組んでいる。また岡崎市内には4校の大学が所在しており、これらの大学に通う学生の参加も見込むことができると予想される。一方で、市民団体の活動実態や環境保全活動に際して抱える課題の有無やその内容、活動参加経験のある大学生の割合については明らかにされていない。

そこで本研究では、岡崎市で活動する環境保全活動団体の運営者、環境保全活動への参加者、 岡崎市内に所在する大学に所属する大学生の三者の環境保全活動に対する意識を明らかにする ことを目的とした。また岡崎市で活動する環境保全活動団体の参加者と、新たな若手の参加者 となりうる大学生の間の、環境保全活動への参加に対する意識の共通点及び差異を明らかにす ることで新規参加者の確保にむけた課題を抽出し、環境保全活動への参加者数の向上と活動の 活性化に対する提案を行うことをも目的とした。なお、本研究における「環境保全活動」とは、 「森林、河川、湿地、動植物などの利用や保全に関わる活動」とし、回答者に対してもアンケート紙面に記載する形式で説明を行った。

2. 調査手法

(1) アンケート調査

岡崎市内で活動する環境保全活動団体の運営者、環境保全活動への参加者、岡崎市内に所在する大学に所属する大学生の三者に対し、以下の通りアンケート調査を実施した。

a) 環境保全活動団体の運営者に対するアンケート調査

環境保全活動団体の活動実態を把握するため、2019年12月から2020年1月にかけて、岡崎市内で活動する環境保全活動団体の運営者(以下、「団体運営者」)に対しアンケート調査を実施した。調査対象は、2019年12月20日時点で岡崎市が運営する市民団体情報ポータルサイト「おかざき市民活動情報ひろば」に登録されている市民団体のうち、①活動カテゴリを「環境保全」、主な活動分野を「環境の保全を図る活動」に設定している、②活動目的、活動内容・事業内容の項目のいずれかにおいて「環境」「川」「山」「里山」「温暖化」「自然」「森林」の7つのキーワードのいずれかが含まれている、③平成30年度分の活動報告書が確認できる、以上の3条件を満たす団体(以下、「活動団体」)とした。

アンケートの設問は、活動場所、活動内容、団体の会員数、平均活動参加人数、会員の平均年齢、団体活動への満足度、活動団体の長所、活動団体の短所、大学生の新規参加の必要性とその理由、今後の自然環境・団体活動への展望とした。このうち、団体の会員数、平均活動人数、会員の平均年齢、大学生の新規参加の必要性とその理由の結果を今回の解析対象とした。団体の会員数と平均活動人数は、10人区切りの選択肢から該当するものを1つ選んでもらう形式とした。会員の平均年齢は、10代~70代以上の各年代から該当するものを1つ選んでもらう形式とした。団体活動への満足度は、活動に対して満足しているかどうかを「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」の4段階で回答し

てもらった。活動団体の長所、活動団体の短所については、それぞれについて自由に記述して もらう形式とした。大学生の新規参加の必要性については、「そう思う」「どちらかといえばそ う思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答した上で、理由を 自由に記述してもらう形式とした。

アンケート調査は対面あるいは郵送での実施を依頼し、対面での回答に応じた団体運営者については調査者と対面した状態でアンケートに回答してもらい、その際の会話内容についてもその後の調査結果の考察の一助とした。また、アンケート実施に際し、活動団体が主催する活動への参加者(以下、「活動参加者」)に対するアンケート調査の実施協力を依頼した。

b) 環境保全活動への参加者に対するアンケート調査

活動参加者を対象とするアンケート実施への協力に応じた活動団体を通じ、2020年1月から2020年2月にかけて、活動参加者へのアンケート調査を実施した。

アンケートの設問は、回答者の性別(任意回答)・年齢、活動参加の動機、活動場所までの所要時間と移動手段、環境保全活動に対する意識について、今後の自然環境・団体活動への展望(任意回答)とした。このうち、環境保全活動に対する意識についての回答データを本研究における解析対象とした。環境保全活動に対する意識については、高瀬ほか(2014)による先行研究で用いられた参加要因および参加課題に関する15項目(表-1)を回答者に提示し、これらについての印象を「感じる」「どちらかといえば感じる」「どちらかといえば感じない」「感じない」の4段階で回答してもらった。また、調査の際には15項目の順序をランダムに入れ替えて提示した。

表-1 環境保全活動に対する意識の詳細な内容

項目名		項目内容
参加要因:	運動機会	いい運動になりそう、いい汗がかけそう
	交流場所	新たに色々な人と出会えそう、友達が作れそう
	自然学習	自然について自分なりの新しい発見ができそう
	癒し効果	植物に癒されそう、リフレッシュできそう
参加課題	情報入手	情報の調べ方が分からない、知りたい情報が見つからない
	自然体験	自然で過ごした経験が少なくて参加のハードルが高い
	知識不足	知識が無くて自分に出来るか心配だ
	活動時間	時間がとれない、日程があわなくて続けられなさそう
	人間関係	活動中1人ぼっちになりそう、他の人とうまく会話できるか心配だ
	体力不足	体力がもつか心配だ
	活動意義	活動内容が本当に自然を保全できるのか疑問である
	活動興味	積極的に参加したくなるような魅力的な活動が少ない
	活動環境	汚れそう、虫に刺されそう、暑い、けがしそう
	活動場所	活動場所が遠い、交通の便が悪そう
	活動費用	費用がかかる、費用が気になる

c) 岡崎市内に所在する大学に所属する大学生に対するアンケート調査

岡崎市内に所在する大学のうち、人間環境大学、愛知産業大学の2校に所属する学生(以下、「大学生」)を対象として、2020年1月にアンケート調査を実施した。

アンケートの設問は、回答者の性別(任意回答)・学年、環境保全活動への参加経験の有無、環境保全活動に対する意識について、今後の環境保全活動への参加意欲、今後の自然環境への展望(任意回答)とした。このうち、環境保全活動への参加経験の有無、環境保全活動に対する意識について、今後の環境保全活動への参加意欲を本研究における解析対象とした。環境保全活動に対する意識については、活動参加者に対する設問(表-1)と同内容とした。今後の環境保全活動への参加意欲は、「参加する意欲がある」「どちらかといえば参加する意欲がある」「どちらかといえば参加する意欲がある」「どちらかといえば参加する意欲がある」「どちらかといえば参加する意欲が無い」の4段階で回答してもらった。また、環境保全活動への参加経験がある回答者については、環境保全活動に対する意識を活動参加的の印象として回答してもらい、追加設問として活動参加の動機、活動参加後の環境保全活動に対する意識の設問は、活動参加者、及び活動参加未経験者に対して質問した15項目(表-1)と同内容とした。

(2) 解析方法

2020年2月14日までに回収できたアンケート用紙のうち、本研究において解析対象とした質問項目の全てに回答されているものを有効回答とした。

活動団体による大学生の新規参加に対する認識を把握するため、「大学生の新規参加の必要性」の回答データとその「回答理由」の記述に使用された単語データの関係性について共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワーク図の作成には KH Coder 3. Alpha. 17K を用いた。

大学生の活動参加への意欲に影響する環境保全活動への意識を推定するため、大学生の回答 結果のうち「今後の環境保全活動への参加意欲」を目的変数、「環境保全活動に対する意識」の 各項目に対する回答を説明変数とした順序ロジットモデルを作成し、各説明変数の有意性について検討した。

また、大学生と活動参加者の間での環境保全活動に対する意識差を検討するため、回答者属性「大学生または活動参加者」の2項を目的変数、「環境保全活動に対する意識」の各項目に対する回答を目的変数としたロジットモデルを作成し、各説明変数の有意性について検討した。

以上の数理モデルは統計ソフトR3.6.2の一般化線形モデル関数glm及び、統計パッケージ ordinal に含まれる順位ロジットモデル関数clmを用いて作成した。

3. 結果

(1) 活動団体に対するアンケート調査

調査対象の条件を満たす 28 団体のうちアンケート調査への協力を承諾頂いた 18 団体にアンケートの配布を行った結果、回収率は 94.4%(17 件)、有効回答率は 94.1%(16 件)であった。

会員数が30名以下の団体は50%(8件)であったが、平均活動参加人数が30名以下と回答した団体は68.8%(11件)、うち10名以下と回答した団体は43.8%(7件)であった。会員の平均年齢について、60代以上と回答した団体は68.8%(11件)で(図-1)、30代以下と回答した団体はみられなかった。

大学生の新規参加の必要性について「そう思う」(必要である)と回答した団体が 56.3%(9 件)、「どちらかといえばそう思う」が 31.3%(5 件)、「どちらかといえばそう思わない」が 12.5%(2 件)で、「そう思わない」(必要でない)と回答した団体はみられなかった。活動団体が認識する大学生の新規参加の必要性と、その理由の記述に使用された単語の共起性を検討した結果、「そう思う(図中 「1」)」「どちらかといえばそう思う(図中 「2」)」の回答と「自然」「今後」「高齢」「若者」「知る」「必要」の間で高い共起性(Jaccard 指数≥0.2) がみられた(図-2)。

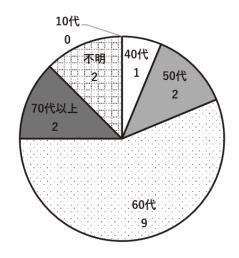


図-1 活動団体(16団体)の会員の平均年齢

Jaccard 係数を表す。

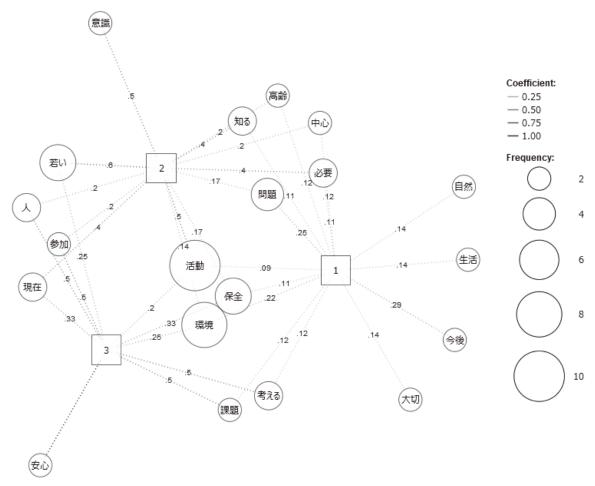


図-2 活動団体の認識する新規参加者としての大学生の必要性とその理由の共起性 図中の数字は大学生の新規参加の必要性 (1:「そう思う」(必要である)、2:「どちらかとい えばそう思う」、3:「どちらかといえばそう思わない」)を示す。 線上の数値は大学生の新規参加の必要性の回答と、その理由の記述に使用された単語の間の

(2) 活動参加者に対するアンケート調査

活動参加者に対するアンケート調査の協力を得られた団体の活動参加者 105 名を対象としてアンケート配布を行った結果、回収率は 31.4% (33 件)、有効回答率 90.9% (30 件) であった。

参加要因についてのすべての質問項目において「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合の合計が70%を上回った(図-3)。また、参加課題についてのすべての質問項目において「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合の合計が50%を下回ったが、「体力不足」「活動興味」「活動費用」についての「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合の合計は40%以上と他項目と比べて多い傾向を示した(図-3)。

(3) 大学生に対するアンケート調査

大学生 308 名を対象としてアンケートを配布した結果、回収率は 96. 1% (296 件)、有効回答率 は 84. 7% (261 件) であった。 有効回答のうち、活動参加経験者は 21. 1% (55 名) であった。

参加要因についてのすべての質問項目において「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合の合計が50%を上回った(図-3)。一方で参加課題についての質問項目をみると、「自然体験」を除くすべての項目で「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合の合計が50%を上回った(図-3)。各項目をみると「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合が「情報入手」「活動興味」「活動環境」で70%以上、「活動時間」「活動場所」で80%以上と特に高かった。

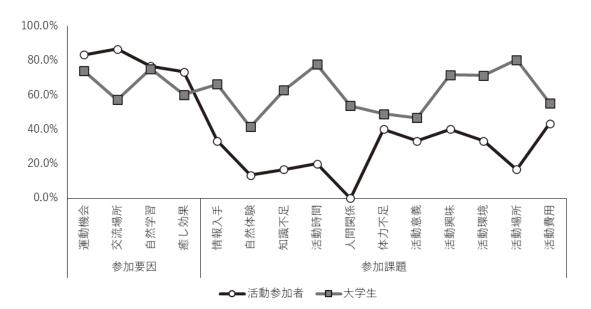


図-3 環境保全活動に対する意識に関する各設問への活動参加者(n=30)と大学生(n=261)の回答傾向

縦軸の数値は「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合の合計を示す。

「今後の環境保全活動への参加意欲」に対する回答を目的変数、「環境保全活動に対する意識」の各項目に対する回答を説明変数とした順序ロジットモデルにより環境保全活動に対する意識が今後の活動参加意欲に与える影響を検討した結果、参加要因に関わる「交流場所」「自然学習」の2変数、参加課題に関わる「自然体験」「体力不足」「活動興味」「活動環境」の4変数が統計学的に有意であることが示された(表-2)。

表-2 大学生の活動参加意欲に影響する要因

項]名	係数	p値
	運動機会	-0.1741	0.266
参加要因	交流場所	0.3865	0.009
沙川女 囚	自然学習	0.6836	0.000
	癒し効果	0.2679	0.062
	情報入手	0.2540	0.085
	自然体験	-0.4596	0.004
	知識不足	0.1354	0.450
	活動時間	-0.2857	0.063
	人間関係	0.2416	0.089
参加課題	体力不足	-0.2742	0.030
	活動意義	-0.1541	0.248
	活動興味	-0.6403	0.000
	活動環境	-0.4198	0.002
	活動場所	0.1916	0.242
	活動費用	0.1798	0.195

色を変更した項目は統計学的に有意な説明変数を示す(p<0.05)

表-3 活動参加者と大学生の環境保全活動に対する意識差

項目名		係数	p値
	(切片)	10.2807	0.000
	運動機会	0.2014	0.557
参加西田	交流場所	0.5165	0.192
参加要因	自然学習	-0.5157	0.180
	癒し効果	0.1554	0.649
	情報入手	0.1016	0.772
	自然体験	0.7035	0.104
	知識不足	-0.7102	0.119
	活動時間	-0.4650	0.190
	人間関係	-1.9819	0.003
参加課題	体力不足	0.7265	0.038
	活動意義	-0.0164	0.957
	活動興味	-0.2421	0.474
	活動環境	-0.2496	0.398
	活動場所	-1.0850	0.003
	活動費用	0.2975	0.412

色を変更した項目は統計学的に有意な説明変数を示す(p<0.05)

(4) 活動参加者と大学生の環境保全活動に対する意識差

回答者属性(活動参加者または大学生)を目的変数、「環境保全活動に対する意識」の各項目に対する回答を説明変数としたロジットモデルにより活動参加者と大学生の間の環境保全活動に対する意識差を検討した結果、参加課題に関わる「人間関係」「体力不足」「活動場所」が統計学的に有意であった(表-3)。

4. 考察

(1) 岡崎市における活動団体による環境保全活動の実態について

活動団体を対象としたアンケートの結果より、活動団体の会員数に比べて平均活動参加人数が少ない傾向が示され、また会員の平均年齢が60代以上と回答した団体が大半を占めた(図-1)ことから、岡崎市においても活動参加者の減少・高齢化の傾向が推察された。大学生の活動への新規参加を望む団体は90%近くにのぼった。大学生の新規参加をあまり希望していない(選択肢「どちらかといえばそう思わない」)2団体は、いずれも町内会活動の一環として環境保全活動を行っている団体であった。

大学生の新規参加を望む回答と共起性の高い単語(図-2)が使用された選択理由の記述をみると、活動における労働力(「新加入者が少なく高齢化が進み参加者を見て作業内容を決めなければならない。」等)、今後の継続性(「過疎化防止のためにも地域に根ざし、地域のために活躍してくれる若者の存在は大切だから。」等)といった理由により大学生の新規参加が希望されていることが示唆された。また、大学生を含む若い世代に環境保全の必要性を理解し(「環境保全活動は、今起きている問題を知り、その原因や対策についてしっかり理解していることが求められる。」「若者の多くは、あまり自然に触れずに育っており、野生の生物たちを理解していないと思います。」等)、主体的に考えてほしい(「岡崎地域の「自然」だけでなく県内県外において経済・仕事優先生活では今後の私達の生活が崩壊しかねません。これからの問題は高齢者の私達の問題ではありません」「環境問題がさらに深刻化していく中で、今後の中心的な役割を担っていく存在のため。」等)といった意見も散見された。

一方で大学生の有効回答のうち活動参加経験者は 21.1%にとどまっており、活動参加経験者の定着のほか、新規参加のきっかけ作りも重要であることが示唆された。

以上より、岡崎市においても環境保全活動の継続のためには活動参加者の減少・高齢化を解決する必要があり、その手段として大学生の新規参加の促進が有効であると考えられた。

(2) 活動参加者と大学生の環境保全活動に対する意識差

活動参加者、大学生の両者ともに参加要因に関わる4項目についての「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合は高く(図-3)、環境保全活動への参加意義や利点については両者ともによく認識されているものと考えられた。

一方で、回答者属性を目的変数とするロジットモデルより、参加課題に関わる「人間関係」「体力不足」「活動場所」の3項目において、活動参加者と大学生の意識差が統計学的に有意であることが示された(表-3)。このことから、大学生の参加促進を図るためには環境保全活動への参加課題の低減や解決が有効であることが示唆された。

「人間関係」については、活動参加者の高齢化が進んでおり(図-1)大学生との間の年代差が大きいことから、「他の人とうまく会話できるか心配だ」といった認識が生まれるものと推定された。高瀬ら(2014)の研究においても、10代や20代の若者は他の参加者との交流を課題として認識する場合が多いことが示されており、活動団体に定着してもらうためには他者との交流

に対する支援が必要であると指摘されている。「体力不足」について、「感じる」「どちらかといえば感じる」の回答割合は大学生の方が高く、環境保全活動にかかる労力が過大評価されていることが示唆された。「活動場所」については、環境保全活動が実施される場所は市街地より離れていることが多いため(活動団体に対するアンケートの設問「活動場所」に対する回答より)、活動参加者も徒歩圏内の場合を除いて自家用車を活用しているケースが多くみられた(活動参加者に対するアンケートの設問「活動場所までの移動手段」に対する回答より)ことから、自家用車を積極的に利用しづらいと考えられる大学生にとっては活動場所への移動のハードルが高いものと推察された。

(3) 大学生の活動参加意欲向上にむけた課題の抽出

大学生の活動参加意欲に影響する要因のうち、参加課題に関するものとして「自然体験」「体力不足」「活動興味」「活動環境」が挙げられた(表-2)。「自然体験」については、参加要因に関わる項目である「自然学習」が活動参加意欲に有意に影響している(表-2)ことから、自然学習が可能であることをアピールすることで「自然体験」に関する課題認識を低減できるのではないかと考えられた。「活動興味」は活動参加のきっかけとしても重要であり、大学生の活動参加意欲の向上には活動内容の充実やアピールが課題として考えられた。

(4) 大学生の環境保全活動への参加促進にむけた方策の提案

以上の結果より、大学生の環境保全活動への参加促進には「人間関係」「体力不足」「活動場所」「自然体験」「活動興味」「活動環境」といった参加課題の解決が重要であることが示唆された。高瀬ら(2014)の研究においても「活動環境」「活動時間」「活動場所」の優先的な課題解決の必要性が指摘されており、市民参加の仕組みを取り入れる保全地を計画する際にはこれら3つが解決された参加のハードルが低い活動を用意することが提案されている。本研究では高瀬ら(2014)の挙げた課題のうち「活動時間」はロジットモデルにおいて有意な意識差としては示されなかったが、活動参加者と大学生の間で回答の傾向差はみられた(図-3)ことから、高瀬らによる提案と同様の活動を用意することが、岡崎市における環境保全参加促進においても効果的であると考えられた。

5. 結言

市民活動に対する積極的な支援がみられる岡崎市においても、環境保全活動における参加者の減少や高齢化といった問題が生じていることが明らかになった。岡崎市内には4つの大学が所在しており、うち1校については自然環境を専攻する学科をもつことから、大学生に対する活動参加にむけた働きかけは、参加者の減少や高齢化の解決に対し極めて重要であるといえる。本研究により、岡崎市における大学生の活動参加促進にむけた課題として挙げられた6項目について、「人間関係」に対しては交流に対する支援、「体力不足」「自然体験」「活動興味」に対しては活動内容や要求される体力量などの情報提供、「活動場所」「活動環境」については参加しやすい立地条件や環境の整備といった、ソフト・ハードの両面からの対策が必要であると考えられた。特にソフト面からの課題解決・低減が望める「人間関係」「体力不足」「自然体験」「活動興味」について、活動内容の充実を図り詳細な情報提供を行うほか、参加のきっかけ作りとしてクラブ・サークル単位や、講義・ゼミ単位で保全活動やイベントへの参加を推奨・依頼するといった、大学ならではの交流支援による活動促進が考えられた。

引用文献

- 1) 岡崎市『岡崎市緑の基本計画』、2012、全125頁
- 2) 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社『生物多様性に優れた自治体ランキング』、 2016、全32 頁
- 3) 環境省『環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律』、2011年10月1日施行
- 4) 高瀬 唯・古谷勝則・桜庭晶子「市民と緑地保全活動団体の意識差からみる保全活動の参加 促進課題」『ランドスケープ研究 77(5)』日本造園学会、2014、553—558 頁
- 5) 栗田和弥・植竹 薫「関東地方における市民による環境 NPO の自然環境保全活動に関する研究」『ランドスケープ研究 62(4)』日本造園学会、1999、400—404 頁
- 6) 中島敏博・古谷勝則「千葉県北総地域の残存緑地に対して里山活動参加者が期待する里山イメージに関する研究」『ランドスケープ研究 67(5)』日本造園学会、2004、653—658 頁
- 7) Yui Takase Katsunori Furuya Komei Mishima, "Study about Experience in Open Space Conservation Activities and Factors to Induce Participation among University Students", The 13th International Symposium of Landscape Architectural Korea, China and Japan, 2012, pp. 201-206
- 8) 高瀬 唯・古谷勝則「大学生の意識から見た緑地保全活動の参加促進課題と課題解決の優先順位」『ランドスケープ研究 76(5)』日本造園学会、2013、717—722 頁

参考等文献

- ・岡崎市「おかざき市民活動情報ひろば」(http://okazaki.genki365.net/)、2019年12月20日参照
- •Koichi Higuchi, 「A Two-Step Approach to Quantitative Content Analysis: KH Coder Tutorial Using Anne of Green Gables (Part I)」 『Ritsumeikan Social Science Review 52(3)』、2016、pp. 77-91
- Christensen, R. H. B. , <code>「ordinal Regression Models for Ordinal Data. 」</code> $$\mathbb{R}$$ package version 2019』, 2019, pp. 12-10

謝辞

本研究の実施にあたり、アンケート調査にご協力頂いた、岡崎市内の環境保全活動団体 18 団体の運営者と活動参加者の方々、大学 2 校の皆様に厚く御礼申し上げます。本研究は岡崎大学懇話会による産学官共同研究助成を受けて実施されました。心より御礼申し上げます。